

パラスタス

大斎第2週－第4週

スボタ 早課

全死者のための祈り

大阪ハリストス正教会

2016年 改訂

大斎 第2、第3、第4のスボタ（全死者の記憶）¹

早課

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、

誦経 「アミン」

来れ、我等の王・神に叩拝せん。

来れ、ハリストス我等の王・神に叩拝俯伏せん。

来れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拝俯伏せん。

誦経 第19 聖詠

願くは主は憂の日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を扨ぎ衛らん。願くは聖所より助を爾に遣し、シオンより爾を固めん。願くは爾が悉くの獻物を記憶し、爾の燔祭を肥えたる物とせん。願くは主は爾の心に循ひて爾に與へ、爾の謀る所を悉く遂げしめん。我等は爾の救を喜び、我が神の名に依りて旌を揚げん。願くは主は爾が悉くの願を成就せしめん。今我主が其膏つけられし者を救ふを知れり、彼は聖天より其救の右の手の力を以て之に對ふ。或は車を以て、或は馬を以て誇る者あり、唯我等は主我が神の名を以て誇る、彼等は動きて顛れ、唯我等は起きて直く立つ。主よ、王を救へ、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給へ。

第20 聖詠

主よ、王は爾の力を樂み、爾の救を歡ぶこと極なし。其心に望む所は、爾之を與へ、其口に求むる所は、爾之を辭まざりき。蓋爾は仁慈の祝福を以て彼をむかへ、純金の冠を其首に冠せたり。彼生命を爾に求めしに、爾之に世世の壽を賜へり。彼の榮は爾の救を以て大なり、爾は尊榮と威嚴とを之に被せたり。爾は彼に祝福を世に賜ひ、爾が顔の歡にて彼を樂ませたり。蓋王は主を頼み、至上者の仁慈に因りて動かざらん。爾の手は爾が悉くの敵を尋ね出し、爾の右の手は凡そ爾を憎む者を尋ね出さん。爾怒る時彼等を火爐の如くなさん、主は其怒に於て彼等を滅し、火は彼等を齧まん。爾は彼等の果を地より絶ち、彼等の種を人の子の中より絶たん、蓋彼等は爾に向ひて惡事を企て、謀を設けたれども、之を遂ぐる能はざりき。爾彼等を立てて的となし、爾の弓を以て矢を其面に發たん。主よ、爾の力を以て自ら舉れ、我等は爾の權能を歌頌讚榮せん。

誦経 光榮は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世に、「アミン」

¹ 参考資料：三歌斎経、八調経から「スボタ」に「アリルイヤ」を歌ふ時の奉事、及び死者祈祷礼儀、The Lenten Triodion, Постная Троида

誦経 【聖三祝文】[至聖三者][天主経]

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を^{いさぎよ}「潔」くせよ、主宰よ、我等の^{あやまち}「愆」を赦せ、聖なる者よ、^{のぞ}「臨」みて我等の病を癒し給へ、^{いさ}「悉」く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」

天に^{いま}在す我等の父よ、願くは爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の^{かて}糧を^{こんにち}今日我等に^{あた}與へ給へ、我等に^{おいめ}債ある者を我等^{ゆる}免すが如く、我等の^{おいめ}債を^{ゆる}免し給へ、我等を^{いざない}「誘」に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 ^{けだし}「蓋」国と権能と光荣は爾父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も^{いつ}世世に、

誦経 「アミン」

誦経 【トロパリ】

主よ、爾の^{たみ}民を救ひ、爾の業に福を降せ、吾が国に^{さいわい}「福」を与へ、爾の十字架にて爾の^{すまい}住所を護り給へ。

光荣は父と子と聖神[°]に帰す。

甘んじて十字架に挙げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる^{すまい}住所に爾の^{めぐみ}「恵」を垂れ給へ、爾の力を以て我が国を司る者を樂ませ、其^{その}諸敵に勝たしめ給へ、彼は爾が和平の武器、勝たれぬ^{かち}勝を以て其^{そのたすけ}「助」とすればなり。

今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」

威厳にして恥を得しめざる転達、至善にして讃詠せらるる生神女よ、我等の祈祷を^{しりぞ}「斥」けず、正教の人の^{すまい}住所を固め、吾が国を護り給へ、^{ひとり}「独」恩寵に満たさるる者よ、爾神を生みたればなり。

【重連禱】(通常のメロディ)

輔祭 神よ、爾の^{おお}大なる^{あわれみ}「憐」に因りて我等を憐め、爾に祈る、^き「聆」き^い「納」れて憐めよ。

(詠) 主憐めよ。(三次)

輔祭 又吾が国の天皇、及び国を司る者の為に祈る。 (詠) 主憐めよ。(三次)

輔祭 又教会を司る我等の(府)主教()の為に祈る。

(詠) 主憐めよ。(三次)

輔祭 又衆^{けいてい}兄弟及び衆「ハリストティアニン」の為に祈る。 (詠) 主憐めよ。(三次)

司祭 ^{けだし}「蓋」爾は仁慈にして人を愛する神なり、我等爾父と子と聖神[°]に光荣を帰す、今も何時も^{いつ}世世に。

(詠) 「アミン」

(詠) 神父よ、主の名を以て祝讃せよ。(福をくだせ)²

² 「祝讃せよ」「福を降せ」祈祷書によって両方あるが、ここでは一般的に歌われる後者を採用した。

司祭 光栄は一性にして生命^{いのち}を施す分れざる聖三者に帰す、今も何時も世世に。
 (詠) 「アミン」

誦経 至高^{いと}きには光栄神に帰し、地には平安^{くだ}降り、人には恵^{めぐみ}臨めり。(三次)
 主よ、我が唇を啓^{ひら}け、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。(二次)

誦経 【六段の聖詠】

第 3 聖詠

主よ、我が敵^{てき}は何ぞ多き、多くの者は我を攻^せむ、多くの者は我が^{たましい}霊を指して、彼は神より^{すくい}救を得ずと云ふ。然れども主よ、爾^{なんじ}は我を衛^{まも}る盾なり、我の榮なり、爾^{なんじ}は我が^{こうべ}首を擧ぐ。我が^{こゑ}聲を以て主に呼ぶに、主は其^{その}聖山より我に^き聴き給ふ。我^ふ臥し、寝ね、又覺^さむ、主は我を^{ふせ}扞ぎ衛ればなり。環^{めぐ}りて我を攻むる萬民^{ばんみん}は、我之^{これ}を懼れざらん。主よ、起きよ、吾が神よ、我を救ひ給へ、蓋^{けだし}爾^{なんじ}は我が諸敵^{しよてき}の頬を批ち、悪人の齒^はを折けり。救^{すくい}は主に依る、爾^{なんじ}の降福は爾^{なんじ}の民^{たみ}に在り。
 我^ふ臥し、寝ね、又覺^さむ、主は我を^{ふせ}扞ぎ衛ればなり。

第 37 聖詠

主よ、爾^{なんじ}の^{いきどおり}憤を以て我を責むる^{なか}母れ、爾^{なんじ}の^{いかり}怒を以て我を罰する^{なか}母れ、蓋^{けだし}爾^{なんじ}の矢は我に刺さり、爾^{なんじ}の手は重く我に加はる。爾^{なんじ}の^{いかり}怒に依りて我が肉に傷まざる所なく、我の罪に因りて我が骨は安きを^{けだし}得ず、蓋^{けだし}我が不法は我が^{こうべ}首に溢れ、重任の如く我を^{おちに}圧す、我の無智に依り我が傷腐れて且臭^かし。我^{かが}屈まりて^{たお}仆れんとし、終日^{しゅうじつ}憂ひて行く、蓋^{けだし}我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰へて痛く^{いた}憊れ、我が心の裂くるによりて^{さけ}號ぶ。主よ、我が^{ことごと}悉くの^{ねがい}願は爾^{なんじ}の前に在り、我が^{なげき}歎息は爾^{なんじ}に隠るるなし。我が心は^{ふる}戦ひ^{おの}栗き、我が力は我より^ぬ脱け、我が目の光も已に我にあるなし。我が^{とも}朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命^{いのち}を^{もと}覓むる者は網を設け、我を^{そこな}害^{そこな}はんと欲する者は我が^{ほろび}淪亡のことを言ひて、毎日^あ悪しき^{はかりごと}謀^{たく}を^{しか}圖む、然れども我は^{みみしい}聾の如く聴かず、^{おうし}啞の如く己の口を啓かず、是に^{ひら}於て我は^こ聞^{おい}くなく、其口に答ふる所なき人の如くなれり、蓋^{けだし}主よ、我^{なんじ}爾^{たの}を待む、主我が神よ、爾^{なんじ}聴き給はん。我言へり、願くは敵は我に勝たざらん、我が足の^{つまづ}踏く時、彼等は我に向ひて誇り高ぶる。我^{ほとん}殆ど^{たお}仆れんとす、我の^{うれい}憂は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の^{はなはだかなし}為に^{はなはだかなし}甚^{はなはだかなし}哀む。我が敵は生きて^{いよいよ}愈^{ゆえ}強く、故なくして我を疾む者は^{ますます}益^{ますます}多し、悪を以て我の善に報ゆる者は、我が善に^{したが}従^よふに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる^す母れ、我に遠ざかる^{なか}母れ、主我の^{きゆうしゅ}救主^{すみやか}よ、^{すみやか}速^{すみやか}に來りて我を救ひ給え。主我が神よ、我を遣つる^す母れ、我に遠ざかる^{なか}母れ、主我の^{きゆうしゅ}救主^{すみやか}よ、^{すみやか}速^{すみやか}に來りて我を救ひ給え。

第 62 聖詠

神よ、爾は我の神なり、我暁より爾を尋ぬ、我が霊は渴きて爾を望み、我が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕ふ、爾の能力と爾の光榮とを見ん為なり、我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に癒る。我が口爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讃め、爾の名に依りて我が手を挙げん。我が霊の飽かさること脂油を以てするが如く、我が口歡の聲にて爾を讚美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思ふ時に在り。蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が霊は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が霊を害はんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃に櫻りて、狐の獲物とならん。惟王は神の為に楽しまん、凡そ彼を以て誓ふ者は譽を得ん、蓋謊を言ふ者の口は塞がれんとす。夜更に爾を思ふ、蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が霊は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。

誦經 光榮は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に帰す。(三次)
 主憐めよ。(三次)
 光榮は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」

誦經 第 87 聖詠

主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願くは我が祷は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ、蓋我が霊は苦難に飽き、我が生命は地獄に近づけり。我は墓に入る者と等しくなり、力なき人の如くなれり、死人の中に投げられて、猶殺されて柩に臥し、爾に復記憶せられず、爾の手より絶たれし者の如し。爾我を深き坎に、闇冥に、淵に置けり。爾の憤は重く我に加はり、爾の波を傾けて我を撃てり。爾我が識る所の者を我より遠ざけ、我を彼等の惡むべき者となせり、我閉されて出づるを得ず。我が目は愁苦に因りて痛く疲れたり、主よ、我終日爾を呼び、手を伸べて爾に向へり。爾豈に死せし者に奇跡を施さんや、死せし者豈に起ちて爾を讚揚せんや、爾の憐は墓の中に、爾の眞は腐敗の地に豈に傳へられんや、爾の奇跡は闇冥に、爾の義は遺忘の地に豈に識られんや。主よ、我爾に呼ぶ、我の祷は晨に爾の前に在り。主よ、爾は何爲れぞ我が霊を棄て、爾の顔を我に隠し給ふ。我少きより禍に遭ひ、幾ど消え亡せんとし、爾の恐嚇を受けて我が疲は極れり。爾の憤は我を度り、爾の恐嚇は我を碎けり、毎日本水の如くに我を環り、齋しく集まりて我を圍む。爾は我が友と親しき者とを我より遠ざけたり、我が識る所の者は見えず。

主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願くは我が祷は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ。

第 102 聖詠

我が霊よ、主を讃め揚げよ、我が中心よ、其聖なる名を讃め揚げよ。我が霊よ、主を讃め揚

げよ、彼が^{ことごと} 悉^{ことごと} くの恩を忘るる^{なか} 母^{なか}れ。彼は^{なんじ} 爾^{なんじ} が^{もろもろ} 諸^{もろもろ} の不法^{ゆる}を赦^{ゆる}し、^{なんじ} 爾^{なんじ} が^{もろもろ} 諸^{もろもろ} の疾^{やまい}を療^{いや}す、
^{なんじ} 爾^{なんじ} の生命^{いのち}を墓^{あわれみ}より救^{めぐみ}ひ、^{なんじ} 憐^{なんじ} と^{なんじ} 恵^{こうむ}とを^{なんじ} 爾^{なんじ} に^{こうふく} 冠^{なんじ} らせ、^{なんじ} 幸福^{こうふく}を^{なんじ} 爾^{なんじ} の望^{なんじ}に飽^{なんじ}かしむ、^{なんじ} 爾^{なんじ} が^{わかがえ} 若^わ復^{かえ}さるること驚^{おどろ}の如^{ごと}し。主^おは凡^おそ迫害^おせらるる者の為^{ため}に義^よと審判^{しんぱん}とを行^おふ。彼は己^みの途^{みち}をモ
 イセイに示^しし、己^しの作爲^{しわざ}をイスライリの諸子^{しよこ}に示^しせり。主^{こうじ}は宏慈^{こうじ}にして^{きようじゆつ} 矜恤^{かんじゆつ}、^{かんじん} 寛忍^{かんじん}にして
^{こうおん} 鴻恩^{こうおん}なり、怒^{おどろ}りて^{おわり} 終^いあり、^{いきどおり} 憤^いを永^{えい}く抱^{いだ}かず。我^わが不法^{ふぽう}に因^よりて我^わ等^らに行^おはず、我^わが罪^{つみ}に因^よ
 りて我^わ等^らに報^はいず、^{けだし} 蓋^お 天^{てん}の地^ちより高^{たか}きが如^{ごと}く、^か 斯^かく主^おを畏^{おそ}るる者に於^おける其^{その} 憐^{あわれみ}は^{おおい} 大^おなり、
 東^{あづま}の西^{にし}より遠^{とほ}きが如^{ごと}く、^か 斯^かく主^おは我^わが不法^{ふぽう}を我^わ等^らより遠^{とほ}ざけたり、^{その} 父^{ちち}の其^{その}子^こを憐^あむむが如^{ごと}く、^か 斯^か
 く主^おは彼^{おそ}を畏^{おそ}るる者を憐^あむむ。^{けだし} 蓋^お 彼^かは我^わが何^{なん}より造^{つく}られしを知^しり、我^わ等^らの塵^{ちり}なるを記念^{きねん}す。人^{ひと}
 の日は草^{くさ}の如^{ごと}く、^{その} 其^{その}栄^{えい}ゆること田^{はな}の華^{はな}の如^{ごと}し。風^{かぜ}之^{これ}を過^すぐれば無^なに歸^{かへ}し、^{その} 其^{その}有^ありし^{ところ} 處^{ところ}も亦^{また}之^{これ}
 を識^しらず。唯^{ただ}主^おの 憐^{あわれみ}は彼^{おそ}を畏^{おそ}るる者に世^よより世^よに至^{いた}り、^{その} 彼^かの義^よは其^{その}約^{やく}を守^{まも}り、^{その} 其^{その} 誠^{まこと}を懷^{おも}
 ひて、^{これ} 之^{これ}を行^おふ子^こ子孫^{そん}孫^{そん}に及^{およ}ばん。主^おは其^{その}寶座^{ほうざ}を天^{てん}に建^たて、^{その} 其^{その}国^{くに}は萬物^{ばんぶつ}を統^すべ治^しむ。主^おの 諸^{もろもろ}
 の天使^{てんし}、能^{ちから}力を具^{そな}へ、^{その} 其^{その}聲^{こゑ}に^{したが} 遵^{したが}ひて其^{その}言^{ことば}を行^おふ者^{もの}よ、主^おを讃^ほめ揚^あげよ。主^おの 悉^{ことごと}くの軍^{ぐん}、其^{その}
 旨^{めい}を行^おふ役者^{えきしや}よ、主^おを讃^ほめ揚^あげよ。凡^おそ主^おの 悉^{ことごと}くの造^{つく}工^{こう}よ、其^{その}一切^{いっけつ}治^しむる^{ところ} 處^{ところ}に於^おて主^おを讃^ほ
 め揚^あげよ。我^わが^{たましい} 靈^{たましい}よ、主^おを讃^ほめ揚^あげよ。
 其^{その}一切^{いっけつ}治^しむる^{ところ} 處^{ところ}に於^おて、我^わが^{たましい} 靈^{たましい}よ、主^おを讃^ほめ揚^あげよ。

第 142 聖詠

主^およ、我^わが^{いのり} 禱^きを聆^きき、^{なんじ} 爾^{なんじ} の眞實^{しんじつ}に依^よりて我^わが願^{ねが}ひに耳^{みみ}を傾^{かたむ}けよ、^{なんじ} 爾^{なんじ} の義^よに依^よりて我^わに聴^きき
 給^{たま}へ。^{なんじ} 爾^{なんじ} の僕^うと^{うったえ} 訟^なを為^なす母^{なか}れ、^{けだし} 蓋^お 凡^おそ生命^{いのち}ある者^{もの}は、^{いつ} 一^{いつ}も^{なんじ} 爾^{なんじ} の前^{まへ}に義^よとせられざらん。
 敵^{たき}は我^わが^{たましい} 靈^{たましい}を逐^おひ、我^わが生命^{いのち}を地^{ふみ}に^{ふみにじ} 蹂^ふみ、我^わを久^{ひさ}しく死^しせし者^{もの}の如^{ごと}く、^{くら} 暗^{くら}に居^おらしむ、我^わ
 が^{たましい} 靈^{たましい}は我^わの衷^{うち}に悶^もえ、我^わが心^{こゝろ}は我^わの衷^{うち}に曠^{むな}しきが如^{ごと}し。我^わ 古^{いにしえ}の日^ひを想^{おも}ひ、^お 凡^おそ^{なんじ} 爾^{なんじ} の行^おひ
 しことを考^{かんが}へ、^{なんじ} 爾^{なんじ} が手^ての工^{こう}作^{さく}を計^{はか}る。我^わが手^てを伸^のべて^{なんじ} 爾^{なんじ} に向^{むか}ひ、我^わが^{たましい} 靈^{たましい}は渴^{かわ}ける地^ちの如^{ごと}く
^{なんじ} 爾^{なんじ} を慕^もふ。主^およ、^{すみやか} 速^{すみやか}に我^わに聴^きき給^{たま}へ、我^わが^{たましい} 靈^{たましい}は哀^{かな}へたり、^{なんじ} 爾^{なんじ} の 顔^{かほ}を我^わに隠^{かく}す母^{なか}れ、^{しから} 然^{しか}
 らば我^わは墓^{はか}に入る者^{もの}の如^{ごと}くならん。我^わに^{つと} 夙^{つと}に^{なんじ} 爾^{なんじ} の 憐^{あわれみ}を聴^きかしめ給^{たま}へ、^{なんじ} 我^わ 爾^{なんじ} を頼^{たの}めばなり。
 主^およ、我^わに行^おくべき途^{みち}を示^しし給^{たま}へ、我^わが^{たましい} 靈^{たましい}を^{なんじ} 爾^{なんじ} に挙^あぐればなり。主^およ、我^わを我^わが敵^{たき}より救^{きう}
 給^{たま}へ、^{なんじ} 我^わ 爾^{なんじ} に趨^きり附^つく。我^わに^{なんじ} 爾^{なんじ} の旨^{めい}を行^おふを教^{おし}え給^{たま}へ、^{なんじ} 爾^{なんじ} は我^わの神^{かみ}なればなり、願^{ねが}くは^{なんじ} 爾^{なんじ}
 の善^{よき}なる神^{かみ}は我^わを義^よの地^ちに導^{みち}かん。主^およ、^{なんじ} 爾^{なんじ} の名^なに依^よりて我^わを生^なかし給^{たま}へ、^{なんじ} 爾^{なんじ} の義^よに依^よ
 りて我^わが^{たましい} 靈^{たましい}を苦難^{くるなん}より引^ひき出^だし給^{たま}へ、^{なんじ} 爾^{なんじ} の 憐^{あわれみ}を以^もて我^わが敵^{たき}を滅^めし、^お 凡^おそ我^わが^{たましい} 靈^{たましい}を攻^せむる者^{もの}
 を夷^へげ給^{たま}へ、我^わは^{なんじ} 爾^{なんじ} の僕^うなればなり。
 主^およ、^{なんじ} 爾^{なんじ} の義^よに依^よりて我^わに聴^きき給^{たま}へ、^{なんじ} 爾^{なんじ} の僕^うと^{うったえ} 訟^なを為^なす母^{なか}れ。
 主^およ、^{なんじ} 爾^{なんじ} の義^よに依^よりて我^わに聴^きき給^{たま}へ、^{なんじ} 爾^{なんじ} の僕^うと^{うったえ} 訟^なを為^なす母^{なか}れ。
 願^{ねが}くは^{なんじ} 爾^{なんじ} の善^{よき}なる神^{かみ}は我^わを義^よの地^ちに導^{みち}かん。

誦經 光榮は父と子と聖神^{せいじん}に帰す、今も何時^{いつ}も世世に、「アミン」
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に帰す。(三次)

【大連禱】 (通常のメロディ)

輔祭 我等安和にして主に祷らん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救^{すくい}の為に主に祷らん、

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一の為に主に祷らん、

輔祭 此の聖堂、及び信と^{つつしみ}慎と神を畏るる心とを以て此^こに来る者の為に主に祷らん、

輔祭 教会を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに^よ因る輔祭職、
^{ことごと}悉くの教衆、及び衆人の為に主に祷らん、

輔祭 我が国の天皇、及び国を司る者の為に主に祷らん。

輔祭 此の都邑と^{およそ}凡の都邑と地方の為に、及び信を以て此^この中に^{うち}居る者の為に主に祷らん、

輔祭 気候順和、五穀豊穰、天下泰平の為に主に祷らん、

輔祭 航海する者、旅行する者、病を患^うふる者、^{かんなん}艱難に遭ふ者、^{とりこ}虜となりし者、及び彼等
の救^{すくい}の為に主に祷らん、

輔祭 我等^{もろもろ}諸の憂愁と^{うれい}忿怒と^{いかり}危難とを免るるが為に主に祷らん、

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}佑け救ひ憐み護れよ、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖
人とを記憶して、我等己の身及び互に^{おのおの}各の身を以て、^{ならび}並に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を
以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主爾に

司祭 ^{けだし}蓋凡そ光栄尊貴伏拝は爾父と子と聖神^{いつ}に帰す、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」

【アリルイヤ】2調

輔祭 (第一句) 爾が選^えび近づけしものは福なり。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第二句) 彼等の記憶は世世に在らん。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第三句) 彼等の^{たましい}霊は福に居らん。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ



【トロパリ】2調

(詠) 使徒、致命者、預言者、成聖者、克肖者及び諸義人、善く戦を終へて信を守りし者よ、祈る、仁慈なる救世主の前に勇みを保つ者として、彼に我等の霊の救はれんことを祈り給へ。(2次)

光栄は父と子と聖神に帰す。

主よ、仁慈なるに因りて爾の諸僕を記憶して、其の在世の時に^い行ひし諸罪を赦し給へ、罪なきものなければなり、唯爾は罪なし、且つ世を^い遊りし者に安息を賜ふよ能くす。

今も何時も世々にアミン。

言ひ難き光の聖なる母よ、我等天使の歌を以て爾を尊みて、敬虔に崇め讃む。



使徒、致命者、預言者、成聖者、

克肖者及び諸義人、善く戦いを終えて信を守りしものよ、

いのる、仁慈なる救世主の前に勇みを保つものとして、

かれに我等の霊の救われんことを祈りたまえ。

光栄は父と子と聖神に帰す、

主よ、仁慈なるによりて、爾の諸僕を記おくして、

其の在世の時にいし諸罪を赦したまえ。

罪なき者なければなり、

唯爾は罪なし、且つ世を逝りし者に安息を賜うを能くす。

今も何時も世に アミン、

言い難きひかりの聖なるははよ、

我等天使の歌を以て、爾を尊みて、敬虔に崇め讃む。

第16カフィズマ（聖詠）の誦読

〔第1スタチア〕『聖詠經』を用いる。

誦經 第109 110 111 聖詠

誦經 光榮は父と子と聖神[°]に歸す、

（詠） 今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す。（三次）
 主憐れめよ（3回）、光榮は父と子と聖神に歸す。

誦經 今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」

〔第2スタチア〕

誦經 第112 113 114 聖詠

誦經 光榮は父と子と聖神[°]に歸す、

（詠） 今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、
 光榮は爾に歸す。（三次）主憐れめよ（3回）、光榮は父と子と聖神に歸す。

誦經 今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」

〔カフィズマ 第3スタチア〕

誦經 第115 116 117 聖詠

誦經 光榮は父と子と聖神[°]に歸す、今も何時も^{いつ}世世に、「アミン」
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す。（三次）
 主憐めよ。（三次）

誦經〔セダレン〕（坐誦讃詞）八調經その週の調、スポタ早課から「致命者讃詞」3、「死者の」、「生神女讃詞」

〔ネポロチニ〕「道に玷なきもの」（118 聖詠） 2段に分けて（1~93 と 94~175）

118-1 道に玷なくして、主の律法を履み行ふものは福なり。（楽譜は一例、以下適宜歌う）

附唱 主よ、爾の僕婢の靈を安んぜしめたまえ



118-2 主の啓示を守り、心を盡くして彼を尋ぬる者は福なり。

附唱 主よ、爾の僕婢の靈を安んぜしめたまえ

-----118-91 まで同様に唱える（歌う）-----

118-92 若し爾の律法我的慰めとならざりしならば、我は我が禍いの中に亡びしならん。

附唱 主よ、爾の僕婢の靈を安んぜしめたまえ

118-93 我永く爾の命を忘れざらん、爾此れを以て我を生かせばなり。

附唱 主よ、爾の僕婢の霊を安んぜしめたまえ

<注：途中の光栄讃詞は唱えない>

「死者の連祷」

輔祭 我等復又安和にして主に祈らん、 (詠) 主憐れめよ、
 輔祭 又寝りし神の僕婢 () の ^{たましい} 霊の安息の為、及び彼等に凡そ自由と自由ならざる罪の赦
 されんが為に祈る、 (詠) 主憐れめよ、
 輔祭 主、神が彼 (等) の霊を諸擬人の安息する所に納れ給わんことを祈る (詠) 主憐れめよ、
 輔祭 彼等に神の憐れみと天国と諸罪の赦とを賜はんことをハリストス吾が死せざるの王及
 び神に願ふ、 (詠) 主賜へよ、
 輔祭 主に祈らん、 (詠) 主憐れめよ、
 司祭 蓋ハリストス我等の神よ、爾は寝りし爾の僕婢 () の復活と生命と安息なり、我等
 光栄を爾と爾の無原の父と至聖至仁にして生命を施す爾の神^o とに献ず、今も何時も
 世々に、 (詠) 「アミン」



第2段 118-94-175

118-94 我爾に属す、我を救い給え、我爾の命を求めたればなり。(歌い方の例)

附唱 救世主よ、我を救い給え。(楽譜例は次ページ)



118-95 悪人は我を伺いて滅ぼさんと欲す、惟我爾の啓示を究む。

附唱 救世主よ、我を救い給え。

-----以下 174 節まで同様に読む-----

118-175 願わくは我が霊生きて爾を讃栄せん、願わくは爾の定めは我を助けん。

附唱 救世主よ、我を救い給え。

118-176 我は亡われたる羊の如く迷えり、爾の僕を尋ね給え、蓋我爾の誠めを忘れざりき。

附唱 救世主よ、我を救い給え。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神や光栄は爾に帰す (3回)

〔トロバリ〕 5 調

（詠） （附唱） 主や爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

聖人の群は生命の泉と天堂の門とを得たり、願くは我も痛悔を以て道を得んことを。我は亡びし羊なり、救世主よ、我を呼び返して救ひ給へ。

（附唱） 主や爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

神の羔を伝へ、己も羔の如く屠られて、老いざる永久の生命に移りし聖なる致命者よ、我等に罪償の赦を賜はんことを切に祈り給へ。

主よ、爾は崇め讃めらる、 爾の誠めを我に教え たまへ。

聖人の群は生命の泉と天堂の門とを 得 た り、

願くは我も痛悔を以て道を得んこ こと を、

我は亡びし羊 なり、 救世主よ、我を呼び返して救ひたまへ。

主よ、爾は崇め讃めらる、 爾の誠めを我に教え たまへ。

神の羔をつたえ、 己も羔の如く屠られて、

老いざる永久の生命に移りし 聖なる致命 者 よ、

我等に罪償の赦を賜はんことを切に 祈りたまへ。

（附唱）

主や爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

狭く苦しき道を過りて、／生ける中十字架の衡の如く負ひ、／信じて我に従ひし衆人よ、／来たりて汝らの為に備へたる褒賞と天の栄冠とを楽しめよ。

（附唱） 主や爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

我は罪惡の創を逐へども、／爾が言ひ難き光榮の像なり。／主宰よ、爾の造りし者に憐を垂れ、／爾の恵にて浄め、／切に望める生国を我に与へて、／我を

復樂園にすむ者と為し給へ。

(附唱) 主や爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

昔無より造りて、／爾が神たる像^{かたち}にて飾り、／戒めを犯すに因りて／復我を我が出でしに帰しし主よ、／我神の旨^{すめ}に適ふ位に升せ、／古の華麗^{うつくしき}を以て我を改め給へ。

(附唱) 主や爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

神よ、爾の諸僕を安んぜしめて、／聖人の群と義人が日の如く光れる樂園に入れ給へ。／爾の眠りし諸僕を安んぜしめて、／其の悉くの過ちを思ふ勿れ。

光栄は父と子と聖神に帰す。／一つの神性の三つの光を敬^{つつし}み歌ひて呼ぶ、無限の子と、聖神よ、／爾は聖なり。

我等信を以て爾に勤むる者を照らして、／永遠の火を免れしめ給へ。

今も何時も世世にアミン。／衆人の救の為に身にて神を生みし潔き者よ、慶べ、人の属^{やから}は爾に因りて救を得たり。／潔くして讃美たる生神女よ、願くは我等爾に因りて樂園を得んことを。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ。神よ、光栄は爾に帰す。(3回)

「死者の連祷」

輔祭 我等復又安和にして主に祈らん、 (詠) 主憐れめよ、
 輔祭 又寝りし神の僕婢()の霊^{たましい}の安息の為、及び彼等に凡そ自由と自由ならざる罪の赦されんが為に祈る、 (詠) 主憐れめよ、
 輔祭 彼等に神の憐れみと天国と諸罪の赦とを賜はんことをハリストス吾が死せざるの王及び神に願ふ、 (詠) 主賜へよ、
 輔祭 主に祈らん、 (詠) 主憐れめよ、
 司祭 蓋ハリストス我等の神よ、爾は寝りし爾の僕婢()の復活と生命と安息なり、我等光栄を爾と爾の無原の父と至聖至仁にして生命を施す爾の神^おとに献ず、今も何時も世々に、 (詠) 「アミン」



【セダレン】5調

我が救世主よ、／爾の諸僕を義人等と偕に安んぜしめて、／録しし如く、これを爾の庭に居らしめ給へ。／爾の仁慈なるに因りて、／其の自由と自由ならざる、其の凡そ知ると知らざる罪を恕し給へ、／爾は人を愛する主なればなり。／／

光栄は父と子と聖神に帰す。／

其の知ると知らざる罪を恕し給へ、／爾は人を愛する主なればなり。／／

今も何時も世世にアミン。／

童貞女より世界に輝き、／彼を以て光の諸子を顕ししハリストスカみよ、／／我等を憐み給へ。

誦経 第 50 聖詠

神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹し給へ。
 屢我を我が不法より洗ひ、我を我が罪より清め給へ、蓋我は我が不法を知る、我の罪は常に我が前に在り。我は爾独爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審斷に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。「イソップ」を以て我に沃げ、然せば我潔くならん、我を滌へ、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給へ、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給へ。神よ、潔き心を我に造れ、正しき霊を我の衷に改め給へ。我を爾の顔より逐ふこと母れ、爾の聖神を我より取り上ぐることを母れ。爾が救の喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、不虔の者は爾に帰らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讃美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲せば我之を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の霊なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給え、其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犠を奠へんとす。

司祭 神よ、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教の「ハリストティアニン」等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給へ、至浄なる我等の女宰・生神女・永貞童女マリヤの禱と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊き預言者・前驅・授洗イオアン、光栄にして讃美たる聖使徒、我等の聖神父・ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父・全ロシアの奇蹟者ペトル、アレキシイ、イオナ、フィリップ、光榮なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、聖〇〇（本堂の聖人の名を擧ぐ）及び悉くの聖人の轉達に因りて、大仁慈の主よ、爾に求む、我等罪人爾に禱る者に聆き納れて、我等を憐めよ。

（詠）主憐めよ（十二次）

司祭 爾が獨生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す

爾の神^{ととも}と偕に讃揚せらる、今も何時も世に^{いつ}。

(詠) 「アミン」

Lm-12主憐れめよ12回

主 あわれめ (よ) 主憐れめ (よ)、主憐れめよ 主憐れめよ

主憐れめよ、主憐れめよ、主憐れめよ、主憐れめよ、主憐れめよ

主 あわれめよ、主憐れめよ、主憐れめよ アミン

※カノンへ

カノン

第1から第5歌頌は、月課経から聖人のカノン（イルモス＋トロパリ5、合計6）、その教会の聖人のカノン（4句）。イルモスを歌ったあと、冠詞なしでトロパリを唱える。残りのトロパリに「諸預言者歌頌」（連接歌集 P2278）から最後の6句をつけて唱え、最後は「光栄は」、「今も」に続いてトロパリ。

第6歌頌以降は、教会の聖人のカノンは省き、月課経の聖人の第1のカノンから6句、三歌斎経のカノンを2つ（イオシフの、フェオドルの）から8句と付加された致命者と死者のトロパリ2句。「諸預言者歌頌」（連接歌集 P2278）全文はとなえずに、最後の6句（8段にと記載があるところ）を付して三歌斎経のカノンのトロパリを唱える。

ここでは、ミネヤがないので、第1から第5歌頌は省略。第6歌頌、イオシフのカノンのイルモスは読み、フェオドルのカノンのイルモスのみ歌う。

第2週土曜日

第6歌頌 三歌斎経 連接歌集 <イオシフのカノン八調>

（イルモス）我禱を主の前に漕ぎ、我が憂を彼に告げん、我が霊は悪に満ち、我が生命は地獄に近づきたればなり、我イオナの如く祈る、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。（楽譜なし）

我が首は巖の間を潜り、我地の中に下れり、其永遠の關は我を閉せり。

救世主よ、聖なる者は最多くの苦を以て千萬の敵を斃して、爾の多くの福を獲たり。求む、仁慈なる主として、彼等の祈禱に由りて我が多くの罪過を潔め給へ。

主我が神よ、願はくは我が生命は淪滅より爾に上げられん。

我等ハリストスの受難者を歌ひて、同心に彼等に呼ばん、主宰の苦に效ひし者よ、我等の霊の諸慾を醫して、惡しき習を齋まん爲に我等を堅め給へ。

我が霊我を離れんとする時、我主を記念せり。

救世主よ、爾は死を寢に變じ、墓に寝ぬるを忍びて、死者に生命を賜へり。求む、聖なる受難者の祈禱に因りて、世を逝りし者に選ばれたる者と偕に立つを得しめ給へ。

願はくは我が禱は爾に至り、爾の聖なる殿に至らん。

生神女讃詞、全能にして無垢なる言、身を取りし主を言ひ難く生みたる純潔なる少女よ、我に齋して凡の罪より離れん爲に力を授けて、我が汚を潔むる涙を與へ給へ。

イルモス、「諸慾の深處は我を沈め」。

<フェオドルのカノン 3調>

虚しくして偽なる處神を敬ふ者は己の矜恤者を棄てたり。

我等は敬虔に致命者の記憶を行ふ。致命者を愛する者よ、來りて喜び、歌を以て彼等を尊みて、彼等に勝利を賜ひしハリストスを崇め讃めん。

然れども我讚美の聲を以て爾に祭を獻げん、我が誓ひし事は爾主に我が救の為に之を償はん。

受難者よ爾等は先に傷の試を受け、其後石にて撃たれ、鋸にて解かれ、猛獸の食に昇へられ、ハリストスの羔として屠られたり、然れども爾等常に生く。』

光栄は父と子と聖神に帰す

[三者讃詞] 我三位を一性に合せ、一性を三位に分つ、斯く三位一性の神を承け認めて、同

じくサウェリイ及びアリイの懸崖を避く。

今も、何時も世々にアミン

[生神女讃詞] 爾は産の後にも童貞女と現れたり、斯く童貞を守り、又子を生み給へり、神の母よ、爾に於て行はれし事は實に異常なる事なり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

或は句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

[致命者讃詞] 致命者よ、爾等の忍耐の血は斷えず我等の爲に主に祈る、故に今も我等が恥づべき諸愆を齋まんことを祈り給へ。

句、彼等の靈は福に居らん。

死者の讃詞、至りて洪恩なる主よ、萬萬の天使が前に立ちて、爾が全世界を審判する時、寢りし者に定罪せられずして爾の前に立つを得しめ給へ。

(詠) (イルモス) 諸愆の^{ふかみ}深處は我を沈め、逆風の^{あれ}凶暴は起こりて我を攻む。救世主よ、急ぎて我を救ひ、預言者を猛獸より救ひし如く、我を^{ほろび}淪滅より脱がれしめ給へ。

第6歌頌



諸^{ふかみ}あくの深處は我をしずめ、逆風の^{あれ}凶暴は起こりて
 我を攻—む。救世主よ、いそぎて我をすくい、
 預言者を猛獸より救いしごとく我を^{ほろび}より
 のがれしめたまえ。

[小連禱]

輔祭 我等^{またまた あんわ}復又安和にして主に禱らん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}佑け救ひ憐み護れよ、

(詠) 主憐めよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に^{おのおの}各の身を以て、^{ならび}并に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭^{けだし} 蓋 爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神[°]に獻ず、今も^{いつ}何時も世々に、

(詠) 「アミン」

[コンダク]

(詠) ハリストスよ、爾が諸僕の^{たましい}靈を諸聖人と^{とも}偕に、^{やまい}疾も^{かなしみ}悲も^{なげき}歎もなく、^{ただおわり}惟終なき^{いのち}生命の在る處に安んぜしめ給へ。」



イコス略

第7歌頌

イルモス、「エウレイの少者は爐に在りて勇ましく焰を踐み、火を露に變じてよべり、主神よ、爾は世々に崇め讃めらる。」(楽譜なし)

主我が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、世々に尊まれ、讃め揚げらる、

至榮なる主の受難者よ、爾等は血の雨を以て迷の焰を滅し給へり。祈る、ハリストスに奉る祈禱を以て我等を將來の火より救ひ給へ。

爾の光榮にして聖なる名も崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

獅子の口を塞ぎ、苦の火を忍びし受難者よ、爾等は天上の福樂を嗣ぎ給へり、我等にも之を得しめんことを恒に祈り給へ。

爾は聖なる爾の光榮の殿に崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

盛に神の光に照されたる勇敢なる受難者よ、世を逝りし信者の爲に罪の赦と、樂園に入ることと、生命に與ることとを求め給へ。

ヘルウィムに坐し、淵を鑑みる者よ、爾は崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

【生神女讃詞】童貞女よ、我歌を爾に奉る、諸惡に制せらるる我を棄つる勿れ。潔き者よ、我に齋に由りて全き革新と善良なる度生とを與へ給へ。

爾は光榮なる爾の國の寶座に崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

受難者よ、爾等は苦しめらるる時苛虐者を驚かして、火と劔と猛獸とを慰と爲して、我が先祖の神を歌へり。

爾は天の穹蒼に崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

ハリストスの致命者よ、爾等は肢體を寸斷せられ、火に焚かれて、馨しき祭として神に捧げられたり。求む、常に我等の爲に彼に祈り給へ。

光榮、

[三者讃詞] 三位に於て惟一なる神、父、子、聖神、單一の神性、尊き三者、無原の原始を讃榮す。

今も。

[生神女讃詞] 至聖なる女宰生神女よ、爾の諸僕の祈禱を納れて、之を萬有の神に捧げ給へ、我等を凡の誘惑より救はん爲なり。

句、地上の聖人と爾の奇異なる者とは、我専ら之を慕ふ。

[致命者讃詞] 致命者の會よ天より臨みて、爾等を歌ふ我等を熱心に齋の時を終へん爲に祝福して聖にし給へ。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

[死者の讃詞] 人人の行爲を知る主よ、信を以て爾に移りし者に、神として、自由と不自由との罪を宥して、彼等を安ぜしめ給へ。

(詠) 爐の焰に露を注ぎ、少者を焚かるるなく救ひし主、吾が先祖の神よ、爾は世世に崇め讃めらる。

**第8歌頌**

(イルモス) 爾の誠に熱中せし少者は、爾の恩寵に因りて、窘迫者及び火焰に勝つ者と為りてよべり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

天の諸の鳥と、野獣と、一切の家畜は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

柔弱の肉體を以て種種の苦を忍びし受難者よ、爾等は病む者の爲に醫師と現れたり。故に我呼ぶ、我が傷める靈を齋の時に痛悔を以て醫し給へ。

人の諸子と、イスライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

哀しい哉我や、如何ぞ我が在世の日は怠惰の中に過ぎたる、視よ、終は近づきて、我善行の無き者を受けんことを急ぐ。善く馳すべき程を盡しし致命者よ、我に善き終のあらんことを祈り給へ。

主の司祭と、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

血の滴りを以て無神の火を滅しし神聖なる受難者よ、此の生より移りたる者の爲に其行ひし諸罪の釋かるることと神聖なる永遠の安息とを求め給へ。

諸神と諸聖人の靈、諸義人と心の謙卑なる者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

〔生神女讃詞〕 潔き者よ、イエゼキイリは爾を過られぬ門、凡そ望を失ひし者の爲に痛悔の門を啓く者として預見せり。故に我爾に祈る、彼の安息に到らしむる途を我が爲に啓き給へ。

又、イルモス、「無原なる父より」。

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

受難者よ、爾等は多方の苦を種種に受けて、或者は焚かれ、他の者は鋸にて解かれ、又他の者は斬られて、楽しみて歌へり、ハリストスを崇め歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

至りて讃美たる致命者よ、爾等は己の血を以て四極を聖にし、其僅少なる滴を以て衆に醫治の流を注ぐ。故に爾等常に呼ぶ、ハリストスを崇め歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

我等主なる父と子と聖神[°]とを崇め讃めん、

〔三者讃詞〕 三位なる惟一者、父子生活の神、惟一の神性、惟一の權柄よ、天使の軍は爾暮れざる光を崇め讃む、我等地に在る者も爾を崇め歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

今も何時も世世に、「アミン」。

〔生神女讃詞〕 至浄なる者よ、視よ、我等萬族は爾の至大なるを見て、爾を福なりとす、蓋爾は性に超へて萬物の造成主神及び人を生み給へり。故に我等爾を崇め歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

受難者の會よ、救世主に祈りて、我等が今祈禱と節制とを以て潔く彼に奉事して救を得んことを求め給へ。主を崇め歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

句、彼等の靈は福に居らん。

主よ、復活の望を抱きて敬虔に寝りし者に永遠の生命の爲に起きて潔く爾を讃美し、聖詠者の如く爾を讃美するを得しめ給へ。主を崇め歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

我等主を讃め、崇め、伏し拝みて、世世に歌ひ讃めん。

(詠) 無原なる父より世世の^{さき}前に生まれし神、末の日に生神女に^よ藉りて肉体を^き衣たる主を、全き人及び眞の神として崇め歌ひ、萬世に讃め揚げよ。

第8歌頌

我等神を^ほ讃め^{あが}崇め伏し拝みて 世世に う た い 讃 め ん。

無 原 なる ち ち よ り、 世 世 の ^{さき}前 に 生 ま れ し か ー み

末 の 日 に 生 神 女 に よ っ て、 肉 体 を ^き衣 た る 主 ー を、

ま っ た き 人 お よ び ま こ と の か み と し て、 崇 め う た い、



司祭 生神女光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

我が心は主を崇め、我が^{たましい}靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。



第2句 その婢の卑しきを願み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

→附唱ヘルビムより尊く

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん

→附唱ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、→附唱ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。

→附唱ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、

→附唱ヘルビムより尊く

第9 歌頌

イルモス、「生神女よ、爾は性の法則に超えて、造成者及び主を孕みて、世界の為に救の門と為り給へり、故に我等常に爾を崇め讃む。(楽譜なし)

其聖なる約、即我が祖アウラアムに矢ひたる誓を記念せん、

勇敢なる受難者、我等の心の光明なる嚮導師よ、爾等は神聖なる熾炭と現れて、無神の悪なる物質を焚き、劔を以て悪鬼の軍を斬り給へり。

謂ふ、我等に我が諸敵の手より救はれし後、懼なく、彼の前に在りて、聖を以て、義を以て、生涯彼に事へしめんと。

勇敢なる受難者よ、爾等は苦の暗を過りて、無形の光に移れり。求む、罪惡に昧まされたる

我が卑微なる靈を照し給へ。

子よ、爾も至上者の預言者と称へられん、

至榮なる受難者は肉體の苦を病みたるに因りて、今は世を逝りし信者の爲に病なき安息と樂園の樂とを求む。

蓋主の面前に行きて其道を備へ、彼の民に、其救は即諸罪の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。

〔生神女讃詞〕潔き女宰よ、爾の不當なる諸僕の爲に神聖なる扶助者と現れて、節制の時に我等の禱を世世を宰る主に捧げ給へ。

又、イルモス、「我等は爾不死の泉」

此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、

ハリストスの受難者よ、爾等は神より火の如く地上に置かれて、凡の偶像の迷を焚き、四極に敬虔の燈を燃し給へり。

我等の足を平安の道に向はしめん為なり。

受難者よ、火燄も、屠殺も、刃輪も、百體の斷たるることも、鐵搭も、其他の劇しき苦も爾等をハリストスの愛より離さざりき。

光榮は父と子と聖神に歸す、

〔三者讃詞〕我敬虔の心を抱きて唯一の神性及び三位を歌ひて、位を異にすと雖、敢て神性を分離せず、蓋父子及び聖神は唯一の神なり。

今も何時も世々にアミン

〔生神女讃詞〕純潔なる童貞女よ、我等は爾イエッセイの根及び太祖ダウィドより生ぜし華さきたる杖を崇め讃む、爾我等の靈を救ひ給へばなり。

句、地上の聖人と爾の奇異なる者とは、我専ら之を慕ふ。

致命者の尊き大數よ、ハリストスに祈りて、我等が平安に齋の途を経て、彼の苦を見、之に伏拜するを得んことを求め給へ。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

死者及び生者の神として、死を死し、己の復活を以て衆に生命を賜ふハリストスよ、移しし爾の諸僕をも安ぜしめ給へ。

（詠） 我等は爾不死の泉、諸聖者を以て人類に醫治^{いやし}を賜ふものを常に崇め讃む、爾我等の靈を救ひ給へばなり。

第9歌頌

我 等は爾 不死の いずー み、 諸聖者 を 以ーー て
 人 類に^{いやし}醫治を賜う もの を、 常に^{あが}崇め^ほ讃 む、
 爾我等の^{たましい}靈を救い 給へば なーー り。

9 歌頌イルモスに続いて

〔詠〕 〔常に福〕 常に福にして、全く玷なき生神女、我が神の母なる爾を讃美するは真に当たれり、ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、^{みきお}貞操を破らずして^{かみことば}神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

〔小連祷へ〕

第3週土曜日

第6歌頌 三歌斎経 連接歌集 <イオシフのカノン4調>

（イルモス）「我海の深處に至り、多くの罪の暴風は我を沈めたり、慈憐の主よ、神なるに因りて、我が生命を深處より引き上げ給へ」（楽譜なし）

我が首は巖の間を潜り、我地の中に下れり、其永遠の關は我を閉せり。

至榮なる受難者よ、爾等は血の滴を以て敬虔者の心を潤し、不敬虔者の軍を其中に溺らし給へり。

主我が神よ、願はくは我が生命は淪滅より爾に上げられん。

信者の光榮及び大なる保護者たる受難者よ、爾等は己の百體を以て光榮を萬有の主宰に歸せしに因りて、今絶えず榮せらる。

我が靈我を離れんとする時、我主を記愈せり。

深き坎に置かれし言よ、信を以て死せし者に、聖にせられし受難者の祈禱に由りて、罪の赦と安息とを與へ給へ。

願はくは我が祷は爾に至り、爾の聖なる殿に至らん。

〔生神女讃詞〕 童貞女よ、我等が黙さざる聲を以て爾を崇め讃めん爲に、我等の此の聲を納れて、我等に罪愆の赦を賜はんことを爾の子に祈り給へ。

<フェオドルのカノン 8調>

イルモス、「人を愛する主よ、我多くの罪に圍まれて」

虚しくして偽なる處神を敬ふ者は己の矜恤者を棄てたり。

今は致命者の慶賀なり、我等趨り集まりて、彼等の至りて尊き苦を讃揚して、之に榮冠を冠らせしハリストスを歌頌せん。

然れども我讃美の聲を以て爾に祭を獻げん、我が誓ひし事は爾主に我が救の為に之を償はん。

福たる致命者よ、爾等はハリストスを愛する神聖なる愛に燃されて、熾炭を露の如く履みて、彼を歌へり。

光榮は父と子と聖神に帰す

[三者讃詞] 至りて無原なる三者、及び神聖なる唯一者よ、我爾一光と三光、三一の生命、智慧、言、聖神たる唯一の聖なる神を歌ふ。

今も、何時も世々にアミン

[生神女讃詞] 先祖イエッセイよ、慶べ、爾の根より生命の華として、潔き童貞女より世界を救ふハリストス神は輝き出でたり。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。(或は句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり)

[致命者讃詞] 福たる者よ、爾等はハリストスに堅められ、火と劍と死とを畏れずして、救の承認を守り給へり。

句、彼等の霊は福に居らん。

死者の中に自由に入り給ひし仁愛なる主よ、生と死との宰として、受けし者を安ぜしめて、爾の庭に居らしめ給へ。

(詠) (イルモス) 人を愛する主よ、我多くの罪に圍まれて、爾の洪恩に趨り附く者を受けて、預言者の如く我を救ひ給へ。(楽譜は次ページ)

第6歌頌



ひとを 愛する 主よ われ 多くの罪にかこまれて
 なんじの 洪恩に 趨りつくものを 受けて、
 預言者の ごとく 我等を すくいた まえ 小連禱 コンダクへ

[小連禱]

輔祭 我等^{またまた あんわ}復又安和にして主に祷らん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}佑け救ひ憐み護れよ、

(詠) 主憐めよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に^{おのおの}各の身を以て、并に^{ならび}悉^{ことごと}くの我等の生命^{いのち}を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 ^{けだし} 蓋 爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神[°]に獻ず、今も何時^{いつ}も世々に、
(詠) 「アミン」

[コンダク]

(詠) ハリストスよ、爾が諸僕の^{たましい}靈を諸聖人と^{とも}に、^{やまい}疾も^{かなしみ}悲も^{なげき}歎もなく、^{ただおわり}惟終なき^{いのち}生命の在る處に安んぜしめ給へ。」



第 7 歌頌

イルモス、「三人の少者はワウィロンに於て窘迫者の命令を空言と為して、焰の中に呼べり、主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。」(楽譜なし)

主我が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、世々に尊まれ、讃め揚げらる、

靈よ、爾は無知なる慾を愛して、實に誰に似たる者と爲りしか、誰か諸罪を以て爾に超ゆる者ある。ハリストスに呼べ、仁慈なる主よ、我を救ひ給へ。

爾の光榮にして聖なる名も崇め讃められ、世々に尊まれ、讃め揚げらる。

聖なる者よ、聖者の中に息ひ給ふ主に、此の聖なる諸日に於て衆敬虔者の思を聖にせんことを切に祈り給へ。

爾は聖なる爾の光榮の殿に崇め讃められ、世々に尊まれ、讃め揚げらる。

至上者、仁慈に富める至善なる主よ、先に寝りし爾の諸僕に赦を與へて、之を義人等の會に加へ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

ヘルウィムに坐し、淵を鑑みる者よ、爾は崇め讃められ、世々に尊まれ、讃め揚げらる。

[生神女讃詞] 潔き者よ、爾は性の法に由らずして、人と爲りし造物主を生み給へり。彼に今衆人の不法と諸罪とを見ざらんことを祈り給へ。

又、イルモス、「天使を以て少者を火より救ひ」

爾は光榮なる爾の國の寶座に崇め讃められ、世々に尊まれ、讃め揚げらる。

尊き致命者の記憶を爾の教會の喜悅及び靈の安慰と爲しし主吾が先祖の神よ、爾は世々に崇め讃めらる。

爾は天の穹蒼に崇め讃められ、世々に尊まれ、讃め揚げらる。

ハリストスよ、我等は爾に譌らず、爾を諱まずと、致命者は苦の中に呼びて、不法なる審判者を驚かしたり。主吾が先祖の神よ、爾は世世に崇め讃めらる。**光榮、**

[三者讃詞]我等は三位の中に唯一の神性たる父と子と聖神とを尊みて、預言者の如く呼ぶ、主吾が先祖の神よ、爾は世世に崇め讃めらる。

今も何時も世々にアミン

[生神女讃詞] 如何ぞ爾は母として生みて、童貞女に止まる。蓋我は神を生めり、其状を、我に問ふ勿れ、彼欲する所を行へばなりと、神女は呼ぶ。

句、地上の聖人と爾の奇異なる者とは、我専ら之を慕ふ。

[致命者讃詞] 神の選びたる致命者の會よ、爾の諸僕に救世主の神聖にして生命を施す十字架に伏拜する者となるを得しめ給へ。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

[死者の讃詞] 生命の寶藏たる不死の王よ、信と望とに於て移しし爾の諸僕に爾の永遠の生命を得しめ給へ。

(詠)(イルモス) 天使を以て少者を火より救ひ、鳴れる爐の焔を露に變ぜし吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。(楽譜次ページ)



第8歌頌

(イルモス)「衆人の贖罪主全能者よ、爾は降りて、焔の中に敬虔を守りし者に露を注ぎて、歌はしめ給へり、悉くの造物は主を歌ひて崇め讃めよ。」(楽譜なし)

天の諸の鳥と、野獸と、一切の家畜は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

致命者よ、爾等は畏なき思を以て傷ましき苦勞に進みて、肉體の傷を忍びしに由りて、傷なき樂に移りて、凡の心の傷を醫し給ふ。

人の諸子と、イズライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

上なる事を以て朽つべき事に代へたる神聖なる致命者よ、萬衆の神に祈りて、我肉慾に由りて朽ちたる者を齋と爾等の熱切なる祈禱とを以て救ひ給へ。

主の司祭と、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

ハリストスよ、爾の致命者の祈禱に由りて、爾の仁慈を衆に降して、生命より爾慈憐なる主に移りし者に罪債の赦と神聖なる安息とを與へ給へ。

諸神と諸聖人の霊、諸義人と心の謙卑なる者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

〔生神女讃詞〕生神女よ、罪なき神を生みし者として、爾の母たる祈禱を以て我が諸罪を解きて、我等を救ひて呼ばしめ給へ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

イルモス、「神を傳ふる少者は爐の中に」

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

受難者よ、爾等は火の苦を露の沾濕の如く忍びて、喜を以て呼べり、主の造物は主を崇め讃めよ。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

神の軍士たる致命者の隊は誘惑に勝ちて、凱旋して呼べり、主の造物は主を崇め讃めよ。

我等主なる父と子と聖神[°]とを崇め讃めん、

〔三者讃詞〕我等皆子と侔しく父及び至聖なる神に伏拜して、忠信に呼ばん、惟一者にある三者よ、我等の靈を救ひ給へ。

今も何時も世世に、「アミン」。

〔生神女讃詞〕純潔なる者よ、爾は童貞女及び母と顯れて、夫なく萬衆の神を生み給へり。求む、爾の諸僕を救はんことを彼に祈り給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

ハリストス救世主よ、爾の受難者の祈禱に因りて、爾の諸僕に爾の仁慈の記號たる生命を施す十字架を見て、之に伏拜するを得しめ給へ。

句、彼等の靈は福に居らん。

爾の死より起くるを以て死の權を破りし主よ、移りし者を爾の選びたる者と共に安ぜしめ給へ、彼等が爾主を崇め讃めん爲なり。

我等主を讃め、崇め、伏し拝みて、世世に歌ひ讃めん。

（詠） **神を傳ふる少者は爐の中に焰を踏みて歌へり、主の造物は主を崇め讃めよ。**

第8歌頌

我等主を崇め讃め、伏し拝みて世世に うたい 讃 めん

神 を 伝ふる少者は 炉のうちに 焰を踏みて うたえり

主の造物は主を あ が ー め 讃 め よ ヘルビムよりへ

司祭 生神女^{ほめうた}光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

（詠）〔ヘルビムの歌〕

我が心は主を崇め、我が^{たましい}靈は神我が救主を悦ぶ。

〔附唱〕ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、^{みさお}貞操を破らずして^{かみことば}神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。



第2句 その婢の卑しきを願^{かえり}み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、→附唱ヘルビムより尊く

第3句 権能^{ちから}を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん →附唱ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の驕^{おご}れるものを散らし給へり、→附唱ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。 →附唱ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを納^いれて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、 →附唱ヘルビムより尊く

第9 歌頌

イルモス、「エワは不順を病みて、詛を入れたり、爾は、童貞生神女よ、己の産にて世界の為に祝福の華を發けり、故に我等皆爾を崇め讃む」(楽譜なし)

其聖なる約、即我が祖アウラアムに矢ひたる誓を記念せん、

受難者よ、爾等は神靈の石の上に智慧を動なく固めて、諸敵の悉くの悪計に勝ちたり。求む、我靈を害する諸慾に傾けらるる者を神に捧ぐる祈禱を以て固め給へ。

謂ふ、我等に我が諸敵の手より救はれし後、懼なく、彼の前に在りて、聖を以て、義を以て、生涯彼に事へしめんと。

神聖にして實に輝ける致命者の會よ、至仁なる主宰に、節制の時に於て我等衆に諸罪の赦と永遠の喜とを賜はんことを祈り給へ

子よ、爾も至上者の預言者と称へられん、

仁愛にして獨至善なる主よ、復活の望を抱きて寝りし爾の諸僕に爾の暮れざる永遠の光及び樂の糧に與るを得しめ給へ、我等が愼みて爾を崇め讃めん爲なり。

蓋主の面前に行きて其道を備へ、彼の民に、其救は即諸罪の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。

[生神女讃詞] 純潔なる者よ、至聖なる爾の腹は光の居處と爲れり。故に我熱信に爾に呼ぶ、吾が靈の眸子を照して、常に爾を讃揚する者に直き道を示し給へ。

イルモス、「我等爾神の母を讃美し」

此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、

信者よ、我等は致命者の記憶を行ふ、彼等の戦の苦を崇め讃めて、其光榮に與るを得ん爲なり。

幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。

爾等の勇敢に因りて猛獸は甚く畏れ、火は滅え、弓は折られたり。受難者よ、神は爾等の中に奇異なり。

光榮は父と子と聖神に帰す

〔三者讃詞〕至りて無原なる神性、三位の惟一者、父、子、及び聖なる神、光及び神元の生命よ、爾を讃榮する者を護り給へ。

今も何時も世々にアミン

〔生神女讃詞〕我等は爾イズライリの神、童貞女より世界に現れて、我等の救の角を興しし主を崇め讃む。

句、地上の聖人と爾の奇異なる者とは、我専ら之を慕ふ。

世界の祈禱者、ハリストスの受難者よ、爾等の祈禱を以て衆に彼の十字架を見て伏拜するを得しめ給へ。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

神の子よ、生命の泉の湧き、爾の顔の光の輝く處に爾に移りし者を納れ給へ。

（詠）我等爾神の母を讃美し、爾生神童貞女を讃榮す、我が靈の救主を生み給ひしに因る。

第9歌頌



我等 爾神の母を 讃美し、 なんじ 生神童貞女を
 讃榮す 我が靈の救主を生み たまいし による 小連禱へ

9 歌頌イルモ

スに続いて、通常の

（詠）〔常に福〕常に福にして、全く玷なき生神女、我が神の母なる爾を讃美するは真に当たれり、ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

〔小連禱へ〕

* * * * *

第4週土曜日

第6歌頌 三歌斎経 連接歌集 <イオシフのカノン4調>

（イルモス）「我行を以て世俗の淵に沈み、地獄に降りて、イオナが鯨よりせし如く、斯

く呼ぶ、神の子及び言よ、祈る、我を諸悪の深處より引き上げ給へ。」(楽譜なし)

我が首は巖の間を潜り、我地の中に下れり、其永遠の關は我を閉せり。

受難者よ、爾等は多くの忍耐を以て肉體の界を踰えて、諸の苦及び痛傷を忍び給へり。故に爾等を歌頌する者の凡の病を醫し、憂を解き給ふ。

主我が神よ、願はくは我が生命は淪滅より爾に上げられん。

聖なる受難者の軍は天使の萬萬に合せられて、ハリストスの悦を得たる者として、至仁なる神に我等を無数の諸罪より救はんことを祈る。

我が霊我を離れんとする時、我主を記愈せり。

ハリストスよ、爾は殺されて墓に寝ねて、死者を起し、信に於て死せし者に恩寵の富として、諸聖人と偕に安息を給ふ。

願はくは我が傍は爾に至り、爾の聖なる殿に至らん。

[生神女讃詞] 潔き者よ、神の言及び神は人を神成せんと欲して、爾より身を取りて、地上の者と見らる。我等が審判の時に慈憐を得んことを絶えず彼に祈り給へ。

＜フェオドルのカノン 4 調＞

イルモス、「我罪の暴風に沈められて」

虚しくして偽なる處神を敬ふ者は己の矜恤者を棄てたり。

聖なる者よ、爾等は肉と血とを吝まず、畏るることなく己を凡の苦に付して、ハリストスを諱まざりき。故にハリストスは爾等に天より榮冠を降し給へり。

然れども我讚美の聲を以て爾に祭を獻げん、我が誓ひし事は爾主に我が救の為に之を償はん。

我等は行に照されて、致命者の慶賀を迎へ、神に感ぜらるる歌を以て呼ばん、ハリストスの致命者よ、爾等は實に地上に於ける明星なり。

光榮は父と子と聖神に帰す

[三者讃詞] 聖なる三者、無原の神性よ、我は爾唯一の神、唯一の主、三位なる父、子、及び聖神、生れざる者、生れし者、出づる者、常に同一にして永在なる主を讚榮す。

今も、何時も世々にアミン

[生神女讃詞] 嗚呼福たる神の聘女よ、如何にして爾は夫なく生みて、先の如く童貞女に止まりたる。蓋爾は神を生み給へり、畏るべき奇跡や。求む、爾を歌ふ者の救はれんことを祈り給へ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。(或は句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり)

[致命者讃詞] 至榮なる致命者よ、爾等は己の百體の斬らるるを見て、血の流を楽しめり。求む、熱切に我等の爲に主に祈り給へ。

句、彼等の霊は福に居らん。

我を地より造り、我を生かし、我に復地に還らんことを命ぜし主よ、爾が受けし諸僕を安ぜしめて、死の滅亡より救ひ給へ。

(詠) (イルモス) 我罪の暴風に沈められて、鯨の腹に閉さるるが如く、預言者と偕に爾に呼ぶ、主よ、我が生命を淪滅より引き上げて、我を救ひ給へ。

第6歌頌



我 罪の 暴風^{あらし}に 沈められて、 鯨の腹に閉ざさるるが
 ご とく、 預言者と共に なんじに呼ぶ、 主よ、
 我が生命を ほろびより引きあげて、我を 救ひたまえ。

【小連禱】

輔祭 我等^{またまたあんわ}復又安和にして主に祷らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}佑け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖
 人とを記憶して、我等己の身及び互に^{おのおの}各の身を以て、并^{ならび}に^{ことごと}悉くの我等の生命を
 以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主爾に
 司祭 ^{けだし}蓋 爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神[°]に獻ず、今も^{いつ}何時も世に、
 (詠) 「アミン」

【コンダク】(詠) ハリストスよ、爾が諸僕の^{たましい}霊を諸聖人と^{とも}偕に、疾も^{やまい}悲も^{かなしみ}歎もなく、^{なげき}惟終なき生命^{ただおわり}の在る處に安んぜしめ給へ。」

死者のコンダク 6調



ハリストス よ、なんじが 僕婢 の たましい を、
 諸^{せい}聖人とともに、 やまい も かなしみも
 なげきもなく、 おわりなき いのちの
 ある ところに、やすんぜしめ たまえ、

第7歌頌

イルモス、「黄金の偶像に伏拝せざりしアウラムの少者は、黄金が坩堝に於ける如く、火の爐に鍊られ、光れる宮に在るが如く、楽しみて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。」(楽譜なし)

主我が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、世々に尊まれ、讃め揚げらる、

朽つべき肉體の裸にせらるに因りて神聖なる不朽を衣せられたる光明なる受難者よ、爾等は我等の爲に不朽なる童貞女より肉體を受けし主の前に今立ち給ふ。故に惡に因りて裸體と爲りた

る我に聖にせられし衣を衣せ給へ。

爾の光榮にして聖なる名も崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

節制を以て生を送りし受難者の會よ、爾等は己の途に於て勇ましくハリストスを傳へしに因りて、今榮冠を冠りて、其實座の前に立ち、諸天使と偕に靈智なる樂を享くる者として、我等を礙なく節制の途を趨らん爲に堅め給へ。

爾は聖なる爾の光榮の殿に崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

神よ、爾の聖なる致命者の祈禱に由りて、信に於て寢りし爾の諸僕を樂園の住者と爲し、之に靈智なる光を獲しめて、絶えず爾に呼ばしめ給へ、我が先祖の神は崇め讃めらる。

ヘルウィムに坐し、淵を鑑みる者よ、爾は崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

〔生神女讃詞〕童貞女よ、我等爾獨善なる者に祈る、我等惡者と爲りし者を善者と爲し、熱切にハリストス、性の至善なる主に、我等が善を爲して節制の時を終へんことを祈り給へ、蓋我等歌ふ、我が先祖の神は崇め讃めらる。

又、イルモス、「山の上にモイセイと語りて」

爾は光榮なる爾の國の寶座に崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

爾の衆聖者を偉大なる者と爲して、之を奇跡に由りて世界に奇異なる者と爲しし主、我が先祖の神よ、爾は世世に崇め讃めらる。

爾は天の穹蒼に崇め讃められ、世世に尊まれ、讃め揚げらる。

ハリストスの致命者よ、爾等は種種の苦を経て、膝をワアルの前に屈むるを肯ぜずして、神より光榮の冠を受け給へり。

光榮は父と子と聖神に帰す

〔三者讃詞〕惟一にして三者、伏拜せらるる神性、父、子、及び聖神、我が先祖の神よ、爾を歌ふ者を護り給へ。

今も何時も世々にアミン

〔生神女讃詞〕童貞女母、至りて光明なる少女、獨神の前に轉達者なる女宰よ、我等の救はれんことを絶えず祈り給へ。

句、地上の聖人と爾の奇異なる者とは、我専ら之を慕ふ。

〔致命者讃詞〕致命者よ、爾等是不死の王の爲に戦ひて、彼に於ける完全なる信を證して、彼の爲に己の血を流し給へり。

句、主よ、爾が選り近づけし者は福なり。

〔死者の讃詞〕主我が先祖の神よ、暫時の生命より移しし爾の信なる諸僕を爾の生命の光の流るる所に入れ給へ。

（詠）（イルモス）、山の上にモイセイと語りて、棘の中に童貞の形象を顯しし我が先祖の神よ、
爾は崇め讃めらる。



第8歌頌

(イルモス)「主よ、ヘルウィム・セラフィム等は火焰の中に爾の前に立ち、造物は皆爾に美しき歌を歌ふ、人々よ、唯一の造成主ハリストスを歌ひ、崇め、萬世に讃め揚げよ」(楽譜なし)

天の諸の鳥と、野獣と、一切の家畜は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

ハリストスの大名なる受難者、神に於て尊き者よ、彼に奉る爾の大なる祈禱を以て我等衆爾の記憶を歌ふ者を大なる罪及び彼處の苦より救ひ給へ。

人の諸子と、イスライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

ハリストス神の選びたる實に堅固なる聖軍、致命者の會よ、爾等の聖なる祈禱を以て、此の齋の聖なる日に於て我等の智慧と心とを聖にし給へ。

主の司祭と、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

主ハリストスよ、凡そ信に於て受けし者を苦しむる蟲と、切齒と、外の幽暗より脱れしめて、彼等を爾の顔の光の世々に輝く處に入れ給へ。

諸神と諸聖人の靈、諸義人と心の謙卑なる者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

[生神女讃詞] 潔き生神女よ、我等ハリストスの尊き十字架を見て、心より之に伏拜せし者に、爾が主宰に奉る祈禱を以て諸慾より潔められし者として、尊き苦をも見るを得しめ給へ。

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

嗚呼善なる貿易や、ハリストスの聖にせられし致命者よ、爾等は死を以て生を獲、火と劍、嚴寒と猛獸を聊も畏れずして呼べり、主を歌ひて、彼を萬世に讃め揚げよ。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

ハリストスの致命者よ、上には天使の品位、下には我等地上の者は爾の驚くべき苦と爾の勇敢なる功とを讃美して、主を崇め讃め、彼を歌ひて、萬世に讃め揚ぐ。

我等主なる父と子と聖神^oとを崇め讃めん、

[三者讃詞] 我は爾光、三一の生命、父と子、及び出づる神、唯一の神性、三位を尊み、唯一の神を歌頌し、爾主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚ぐ。

今も何時も世々に、「アミン」。

[生神女讃詞] 無玷至浄なる雌鴿よ、地に生るる者は誰か爾を歌はざらん、蓋爾は我等の爲に大なる光、生命の富たるイイスス救世主を生み給へり。我等彼を主として崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚ぐ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者よ、我等は爾等の奇異なる功勞を讃榮して、爾等を戦の馳場の爲に堅めし恩主及び神

を崇め讃め、彼に伏拝して、萬世に讃め揚ぐ。

句、彼等の靈は福に居らん。

死及び生の主神よ、敬虔の心を抱きて移りし者を起して、彼處に義人等の居所に入れて、爾主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚ぐるを得しめ給へ。

我等主を讃め、崇め、伏し拝みて、世世に歌ひ讃めん。

(詠) (イルモス) 地と凡そ其上に在る者、海と諸の泉、諸天の天、光と暗、嚴寒と暑、人の諸子と司祭等とは主を崇め讃めて、彼を世世に讃め揚げよ。

第8歌頌

我等神を^ほ讃め崇め伏しおがみて、世世にうたい讃めん。

地と凡そ^{およ}其の上に在るもの、海と諸々の泉、諸天の天、

光と暗、^{やみ}嚴寒とあつさ、^{しよし}人の諸子と司祭等とは主を

^{あが}崇め^ほ讃めて、かれを世世に^ほ讃めあげよ。

司祭 生神女^{ほめうた}光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

我が心は主を崇め、我が^{たましい}靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより^{たかし}尊く、セラフィムに並びなく^{みさお}栄え、貞操を破らずして^{かみことば}神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

第1句

我が心は主を^{あが}め 我が^{たましい}靈は神我が救主を喜こーぶ

附唱

ヘルビムより尊とくセラフィムに並びなくさ^{みさお}かえ 貞操を

破らずして神言を生みし 実の生神女たる 爾を^{あが}め讃む

第2句 その婢の卑しきを^{かえり}願み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、→附唱ヘルビムより^{よろずよ}尊く

第3句 ^{ちから}権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼

を畏るる者に臨まん

→附唱 **ヘルビムより尊く**

第4句 其の肘の力を表して、心の^{おご}驕れるものを散らし給へり、

→附唱 **ヘルビムより尊く**

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。

→附唱 **ヘルビムより尊く**

第6句 其の僕、イズライリを^い納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、

→附唱 **ヘルビムより尊く**

第9歌頌

イルモス、「権能者は我に大なる事を成せり、其の名は聖なり、其矜恤は世々彼を畏るる者に臨まん」

(楽譜なし)

其聖なる約、即我が祖アウラアムに矢ひたる誓を記念せん、

動なき星たるハリストスの受難者よ、我等の思を照して、神の光明潔浄なる望を行はん爲に堅め給へ。

謂ふ、我等に我が諸敵の手より救はれし後、懼なく、彼の前に在りて、聖を以て、義を以て、生涯彼に事へしめんと。

ハリストスの勇敢なる受難者よ、爾等は諸敵を殺す劍と見らる。求む、爾等の轉達を以て我等を兇惡者の矢より脱れしめ給へ。

子よ、爾も至上者の預言者と称へられん、

洪恩なる主よ、信を以て我等より爾萬有の造成者及び至仁なる主に移りし爾の諸僕をアウラアムの懷に安ぜしめ給へ。

蓋主の面前に行きて其道を備へ、彼の民に、其救は即諸罪の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。

[生神女讃詞] 智慧に超えて肉體にて神を生みし童貞女よ、我が肉體の亂れたる動揺を殺せ、光の潔き雲よ、我が意念に光照を與へ給へ。

又、イルモス、「ハリストス我が救世主」

此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、

至りて讃美たる致命者よ、我等皆爾の聖にせられし苦の功績を見て、之を奇とし、爾等の記憶を歌頌して、ハリストスを崇め讃む。

我等の足を平安の道に向はしめん為なり。

受難者は苦を受けて互に言へり、我等肉體を惜まずして、來りて、ハリストスの爲に死なん、萬世に絶えず喜びて生きん爲なり。

光榮は父と子と聖神に帰す

[三者讃詞] 嗚呼唯一の神性の三者、生れざる父、生れたる子、及び出づる神よ、爾を歌頌する者を爾の仁慈を以て害なく護り給へ。

今も何時も世々にアミン

[生神女讃詞] 慶べ、至尊至潔なる者、童貞の譽、母の固、人人の助、世界の喜、我が神の

母及び婢なるマリヤよ。

句、地上の聖人と爾の奇異なる者とは、我専ら之を慕ふ。

聖者の會よ、我が祈禱を納れて、我に十字架に接吻するを得しめし如く、救の苦にも伏拜せん爲にハリストスに祈り給へ。

句、主よ、爾が選り近づけし者は福なり。

洪恩なる主よ、爾人を愛する主に移りし者を宥めて恕し、之を選ばれたる者の居處に安ぜしめ給へ、爾は生命及び復活なればなり

(詠) (イルモス) ハリストス我が救世主、爾の諸僕の光榮、信者の榮冠、爾を生みし者の記憶を輝かしし主よ、我等皆爾の仁愛を崇め讃む。

第9歌頌



ハリストス我が 救世主、爾の諸僕の光榮、信者の 榮冠、
 爾を生みし者の記憶を かがや 輝かしし 主ーよ、
 我等皆爾の 仁愛 を あが ー め 讃 む。

9 歌頌イルモスに続いて

(詠) [常に福] 常に福にして、全く玷なき生神女、我が神の母なる爾を讃美するは真に当たれり、ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

続いて

[小連絡]

輔祭	我等 ^{またまたあんわ} 復又安和にして主に祷らん、	(詠) 主憐めよ
輔祭	神よ、爾の恩寵を以て、我等を ^{たす} 佑け救ひ憐み護れよ、	(詠) 主憐めよ
輔祭	至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に ^{おのおの} 各の身を以て、并 ^{ならび} に ^{ことごと} 悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、	(詠) 主爾に
司祭	蓋天の衆軍爾を讃揚す、我等も光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世に、	(詠) 「アミン」

誦経 [エクサポスティラリー] (2-4 週共通)

神として星を以て天を飾り、爾の諸聖人を以て全地を照らしし萬有の造成主よ、爾を

歌ふ者を救ひ給へ。

光荣は父と子と聖神に帰す。

神として死者及び生者を司る救世主よ、爾の諸僕を選ばれたる者の居處に安んぜしめ給へ、蓋、彼等は罪を行ひたりとも、爾より離れざりき。

今も何時も世々にアミン。

諸天使の楽しみ、憂ふる者の喜び、ハリスティアニン等の轉達者たる童貞女、主の母よ、我等を護りて、永遠の苦しみより救ひ給へ。

【讃揚のスティヒラ】

誦經 第 148 聖詠

天より主を讃め揚げよ、讃歌は爾神に帰す。天より主を讃め揚げよ、至高に彼を讃め揚げよ、讃歌は爾神に帰す。其悉くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其悉くの軍よ、彼を讃め揚げよ、讃歌は爾神に帰す。日と月よ、彼を讃め揚げよ。悉くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。諸天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。主の名を讃め揚ぐべし、蓋彼言ひたれば、即成り、命じたれば、即造られたり、彼は之を立てて、世世に至らしめ、則を与へて之を踰えざらしめん。地より主を讃め揚げよ、大魚と悉くの淵、火と霰、雪と霧、主の言に従ふ暴風、山と悉くの陵、果の樹と悉くの柏香木、野獸と諸の家畜、匍ふ物と飛ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年と處女、翁と童は、主の名を讃め揚ぐべし、蓋惟其名は高く擧げられ、其光荣は天地に遍し。彼は其民の角を高くし、其諸聖人、イズライリの諸子、彼に親しき民の榮を高くせり。

第 149 聖詠

新たなる歌を主に歌え、其の讃美は聖者の會に在り。イズライリは己の造成主の為に楽しむべし、シオンの諸子は己の王の為に喜ぶべし。舞を以て彼の名を讃め揚げ、鼓と琴とを以て彼に歌うべし、蓋主は其の民を恵み、救いを以て謙卑の者を榮えしむ。諸聖人は光荣に在りて祝い、其の榻に在りて歡ぶべし。其の口には神の讚榮あり、其の手には諸刃の劍あるべし、仇を諸民に報い、罰を諸族に行い、其の諸王を索にて縛り、其の諸侯を鉄の鎖にて繋ぎ、彼等の為に記されし審判を行わん為なり。斯の榮えは其の悉くの聖人に在り。

第 150 聖詠 (スティヒラの数によって調整すること)

神を其の聖所に讃め揚げよ、彼を其の有力の穹蒼に讃め揚げよ。

スティヒラ 1 八調經のその週の調から致命者の

其の権能に依りて彼を讃め揚げよ、其の至嚴かなるに依りて彼を讃め揚げよ。

スティヒラ 2 八調經のその週の調から致命者の

喇叭の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

スティヒラ 3 八調經のその週の調から致命者の

鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

スティヒラ 4 八調經のその週の調から致命者の

和聲の鉢を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉢を以て彼を讃め揚げよ。

スティヒラ 5 八調經のその週の調から致命者の

凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ

スティヒラ 6 八調經のその週の調から致命者の

光栄は父と子と聖神^o に帰す、

スティヒラ 死者の安息の

今も何時も世世に、「アミン」

生神女讃詞

主我等の神よ、光栄は爾に帰す、我等光栄を爾父と子と聖神^o に献ず、今も何時も世世に、「アミン」

光栄は爾我等に光を顕せる主に帰す。

〔頌詠〕至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵^{めぐみ} 臨めり。主天の王、神父全能者よ、主獨生の子イイスス・ハリストス、及び聖神^o よ、爾の大なる光栄に因りて、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。主神よ、神の^{こひつじ} 羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐み給へ、世の^{もろもろ} 諸の罪を任ひし者よ、我等の^い 祷を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は^{ひとり} 獨聖なり、爾は^{ひとり} 獨主イイスス・ハリストス、神父の光栄を顕す者なればなり、「アミン」

我日々に爾を讃め揚げ、爾の名を世世に崇め歌はん。

主よ、爾は世世我等の^{かくれが} 避所たり。

我曾て言へり、主よ、我を憐み、我が^{たましい} 霊を醫し給へ、我罪を爾に得たればなり。主よ、爾に^{はし} 趨り附く、爾の旨を行ふを我に教へ給へ、爾は^{いのち} 我の神、生命の源は爾に在ればなり、我等爾の^{おい} 光に於て光を觀ん。憐を爾を知る者に^{つね} 恒に垂れ給へ。

主よ、我等を守り、罪なくして此の日を^{わた} 度らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、爾の名は世世に尊み歌わる、「アミン」

主よ、爾を^{たの} 侍むに因りて、爾の^{あわれみ} 憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め讃めらる、爾の^{いましめ} 誠を我に^{おし} 訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の^{いましめ} 誠を我に悟らせ給へ。聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の^{いましめ} 誠にて我を照らし給へ。

主よ、爾の^{あわれみ} 憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。^{ほまれ} 讃は爾に帰し、歌は爾に帰し、光栄は爾父と子と聖神^o に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

〔増連禱〕(通常の)

輔祭 我等主の前に吾が朝の^{いのり} 禱を増し加へん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を^{たす} 佑け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ

輔祭 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ

輔祭 平安の天使、正しき教導師、吾が^{たましい} 靈體の守護者を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の罪と^{あやまち} 過とを^{なだ} 宥め^{ゆる} 赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の^{たましい}靈に善にして^{えき}益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、
 輔祭 我等の^{いのち}生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、
 輔祭 我等の^{いのち}生命の^{おわり}終が「ハリストティアニン」に^{かな}適ひ、^{やまい}疾なく、恥なく、平安なること、
 及びハリストスの畏る^べ可き審判に^{おい}於て宜しき^{こたへ}對をなすを賜はんことを求む、
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の^{おの}光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖
 人とを記憶して、我等己の身及び互に^{おのおの}各の身を以て、^{ならび}並に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を
 以て、ハリストス神に委託せん、
 (詠) 主爾に
 司祭 ^{けだし}蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光栄を爾父と子と聖神[°]に献ず、今も何時^{いつ}
 も世世に、
 (詠) 「アミン」
 司祭 衆人に平安
 (詠) 爾の神[°]にも
 輔祭 我等の^{こうべ}首を主に^{かが}屈めん
 (詠) 主爾に
 司祭 ^{けだし}蓋我が神よ、我等を憐みて救ふこと爾に帰す、我等光栄を爾父と子と聖神[°]に献ず、
 今も何時^{いつ}も世世に、
 (詠) 「アミン」

誦經 【挿句のスティヒラ】 (その週の調の死者のスティヒラ→八調經を見る) 【致命者讃詞】 【生神女讃詞】

誦經 至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌ひ、爾の^{あわれみ}憐を朝に^の宣べ、爾の^{まこと}眞を夜に^の宣ぶる
 は美なる哉。(2回)

誦經 【聖三祝文】[至聖三者][天主經]

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時^{いつ}も世世に、「アミン」

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を^{いさぎよ}潔くせよ、主宰よ、我等の^{あやまち}愆を赦せ、聖なる
 者よ、^{のぞ}臨みて我等の病を癒し給へ、^{いざ}悉く爾の名に^よ因る。

主憐めよ (三次)

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時^{いつ}も世世に、「アミン」

天に^{いま}在す我等の父よ、願くは爾の名は聖とせられ、爾の国は^{きた}來り、爾の旨は天に行はるるが如
 く地にも行はれん、我が日用の^{かて}糧を今日我等に^{あた}與へ給へ、我等に^{おいめ}債ある者を我等^{ゆる}免すが如く、
 我等の^{おいめ}債を^{ゆる}免し給へ、我等を^{いざない}誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ。

司祭 ^{けだし}蓋国と権能と光栄は爾父と子と聖神[°]に帰す、今も何時^{いつ}も世世に、

誦經 「アミン」

【トロパリ】2調

(詠) 使徒、致命者、預言者、成聖者、克肖者及び諸義人、善く戦を終へて信を守りし者よ、祈
 る、仁慈なる救世主の前に勇みを保つ者として、彼に我等の^{たましい}靈の救はれんことを祈り給へ。



〔重聯禱〕

輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ。爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

(詠) 主憐めよ、(三次)

輔祭 我が国の天皇及び国を司る者の為に禱る、

輔祭 又教会を司る()主教()、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に祈る。

輔祭 又恒に記憶せらる福たる此の聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の為に禱る、

輔祭 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐・生命・平安・壮健・救贖・眷顧・寛宥及び諸罪の赦を賜はんが為に禱る、

輔祭 又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の為に禱る

司祭 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神[°]に献ず、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

輔祭 睿智

(詠) 福を降せ

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」神よ、我が国の天皇と正教会の教えと正教のすべてのハリスティアニンを永く守り給へ。

司祭 至聖なる生神女や、我等の為に神に祈り給へ、

(詠) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

司祭 ハリストス神我等の恃みよ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

(詠) 光榮は父と子と聖神[°]に歸す、今も何時も世々にアミン、主憐れめよ (三次)、福

を降せ

司祭 ハリストス我等の真の神は、其至浄なる母、光荣にして讃美たる聖使徒、光荣なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる吾が諸神父、聖（本堂及び本日聖人）、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

（詠） アミン、

〔萬寿詞〕 神よ、我が国の天皇を、および国を司る者、我等の（府）主教（某）、および正教のハリスティアニン等を幾とせにも護り給へ。